

学苑 第九〇五号 一五〽三二(二〇一六・三)

馬瀬狂言資料の紹介(9)

—— 追い込みの演出 ——

はじめに

狂言「文荷」は、男色を扱った狂言の一つとして知られているが、三重県伊勢市馬瀬町に伝わる馬瀬狂言の「文荷」(『馬瀬狂言集』所収)は次のような場面で終曲となる。

太「ホウ これが少人の御返事で御座りまする」

主「何の御返事」

太「ハハァー御許されませ 御許されませ」

主「まだ其処に居るか」

太「ハハァー御許されませ 御許されませ」

主「おのれを何としてくりよう知らぬ」

太「先づ御待ちなされませ」

主「待てとは何と」

太「御なつかしきわなあ」

次「ふん」

太「富士の山々」

山 本 晶 子

主「まだ其のつれを言ふ」

太「ハハァー許されませ 許されませ」

次「ちゃんと来い 来い」

主「やるまいぞ やるまいぞ」

太「許されませ 許されませ」

次「ちゃんと来い 来い」

(傍線部は稿者による。以下同じ)

この場面は、少人への恋文を届けるよう、太郎冠者、次郎冠者に命じた主が、二人の帰りが遅いのを案じて見に行くと、二人が破いてしまった手紙を扇で扇いでいるところを目にする。声をかけられた二人は、これが少人からの返事とごまかそうとするが、主に追われ、狂言の作品に多くみられる追い込みで幕となる。が、この追い込みに至る途中で、傍線部の通り、太郎冠者が主に声をかけ、双方の動きが一旦止まることとなる。追われていた太郎冠者が、「先づ御待ちなされませ」と声をかけ、追っていた主がそれに応じたのを受け、「御なつかしきわなあ」「富士の山々」と、恋文にあった言葉を口に出して主をからかい、その後、改めて主に追われ、次郎

冠者と共に退場する。

このように追い込みの途中で動きを止め、言葉を交わす（以下、「追い込みを一旦止める曲」とする）という形が、馬瀬狂言の「瓜盗人」や「花子」にも認められ、特徴的な演出であることをこれまで指摘してきたが、充分に検証するまでには至らなかった。そこで、こうした曲が馬瀬狂言全体ではどの程度あるのか、試みに平成八年刊行の『馬瀬狂言集』で確認すると、所収曲三六曲中、追い込みでの終曲となる曲が一七曲あり、その中で約四割の七曲に、追い込む途中でやりとりをする演出が認められた。半数には届かないが、割合としては多いものと言えよう。

こうした演出の形は、そもそもいつから演じられていたのか、なぜ演じられていたのか。本稿では、追い込みを止める曲の演出の意図や背景について、各曲の分析を行い、改めて馬瀬狂言の演出の特徴を明らかにすることとしたい。

一 追い込みを一旦止める曲

まず、追い込みを一旦止めるという演出はどの程度認められるのか、その現状を調べるため、馬瀬狂言資料と、馬瀬狂言の流派とされる和泉流諸本における追い込みの曲についてまとめたものが表1である。追い込みを一旦止める形の中には、次の「樋の酒」（『馬瀬狂言集』所収）のように、

太「先づお待ちなされませ 主「待てとは何と 太「御許されませ御許されませ 主「あの横着者やるまいぞやるまいぞ 次「ちや^マっと来いちや^マっと来い 太「御許されませ御許されませ

と、「先づお待ちなされませ」と呼び留めた後、再び「御許されませ」と、

許しを乞うだけで、再び追われるものもあるため、これらを先の「文荷」の例とは区別してまとめることとした。

また追い込みの曲の総数を確認するにあたり、終曲のあり方も曲によって多様であるため、以下の通りに判断してまとめた。

・終曲の演出は、各台本によって異なるものもあり、今回取り上げた曲の中には、台本によって追い込みでない場合もあるが、一本でも追い込みが認められた曲は、全て調査の対象とした。

・台本に「追込」と明記されていないとも、「やるまいぞ」などの言葉があれば、追い込みと判断した。例えば「子盗人」のように、亭主が盗人を追い込み、その後乳母が赤子を抱いて幕に入る場合も含めることとした。

今回調べた資料は以下の通りである。³⁾

- ① 馬瀬現行
- ② 馬瀬資料
- ③ 天理本
- ④ 和泉家古本
- ⑤ 明和中根本
- ⑥ 波形本
- ⑦ 和泉流秘書
- ⑧ 古典文庫本
- ⑨ 狂言集成
- ⑩ 狂言大全集

馬瀬狂言資料については、「①馬瀬現行」と「②馬瀬資料」と二種類に区別した。「①馬瀬現行」は、現行曲の目安となる『馬瀬狂言集』所収曲

表1 追い込みを一旦止める曲 ①

曲名	①馬瀬現行	②馬瀬資料	③天理本	④和泉家古本	⑤明和中根本	⑥波形本	⑦和泉流秘書	⑧古典文庫本	⑨狂言集成	⑩狂言大全集
芥川	○	—	×	×	○	○	—	○	○	○
居杭	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○
石神	—	—	○×	○×	—	●	—	●	○	○
因幡堂	—	○	○	○	●○	○	●	●○	○	○
犬山伏	—	○	○	—	○	○	—	○	○	○
人間川	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
伊呂波	○	○	×	×	○	○	○	×	○	○
岩橋	—	—	○	○×	○	○	○	—	○	○
魚說法	—	○	○	○	○×	○	○	○	○	○
歌争	—	—	○	○	○	○	—	○	○	○
内沙汰	—	—	×	○×	×	○	—	●	×	×
瓜盗人	●	●	○	○	○	○	○	○	○	●
鬼の継子	—	—	×	—	○	○	○	—	○	○
伯母ヶ酒	—	●	○×	○	○	○	—	○	○	○
懷中髻	—	—	○	○	○	○	○	—	○	—
鏡男	—	—	○×	○×	○	○	○	○	○	○
柿山伏	×	○	×	—	○	○×	×	○	×	○
蝸牛	—	—	×	—	×	○	×	○	○	○
隠狸	○	○	—	—	—	○	—	○	○	○
角水	—	—	×	○×	○	○	○	—	○	○
金岡	—	—	○	—	—	○	—	●	○	—
金津地藏	—	—	×	×	○	○	—	○	○	—
蟹山伏	—	○	○	—	○	○	○	○	○	○
鐘の音	—	×	○	○	—	×	—	×	×	×
河原太郎	—	—	○	○	○	○	—	—	○	—
雁礫	○	○	×	×	×	○	○	○	○	○
狐塚	—	○	○	○	○	○	—	○	○	○
木六駄	—	○×	×	×	—	○	—	○	○	○
禁野	—	×	○×	○×	×	×	—	×	×	—
杭か人か	—	—	—	—	○	○	×	×	○	—
茸	—	○	×	—	○	×	○×	○	○	○
闇罪人	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○
口真似	—	○	×	×	○	○	○	×	×	×
首引	—	—	×	—	○	○	○	○	○	○
鞍馬髻	—	—	—	—	×	×	—	—	○	×
柑子俵	—	○	○	○	○	○	—	○	○	—
膏葉煉	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○
小傘	—	×	×	×	○	○	○	—	○	—
腰祈	×	—	×	—	×	×	×	○	○	×
子盗人	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○
昆布売	—	○	○	○	—	○	—	○	○	○
賽の目	—	—	×	○×	—	○	○	—	○	—
酒講式	—	—	×	×	—	×	—	×	○×	—
咲嘩	—	—	×	×	○	○	○	×	×	○
佐渡狐	○	○	○	—	○	○	—	○	○	○
猿座頭	—	○	○	—	○	○	○	—	○	○
三人片輪	—	○	—	—	○	○	—	○	○	○
磁石	—	—	×	○	—	○	—	○	○	○
止動方角	◎	○	○	○	○	○	—	○	○	○
清水	●	○	○×	○×	○	○	○	○●	○	○
舎弟	—	○	×	○	—	○	○	○	○	○
挂杖	—	—	×	×	○	○	○	—	○	—
真奪	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○
素袍落	—	—	○	○×	○	○	—	○	○	○
墨塗	—	—	×	○	—	○	○	○●	○	○
節分	—	—	○	×	—	○	—	○	○	○
宗八	—	○	○	○	○	○	—	○	○	○
空腕	—	×○	—	—	×	×	—	×	○×	×
大般若	—	—	×	×	—	○	—	—	—	—
宝の笠	—	—	○	○	○	○	○●	●	○	×
竹の子	—	—	×	×	○	○	○	○	○	○
太刀奪	—	—	○	○	○	○	○	○	○	○

表1 追い込みを一旦止める曲 ②

曲名	①馬瀬現行	②馬瀬資料	③天理本	④和泉家古本	⑤明和中根本	⑥波形本	⑦和泉流秘書	⑧古典文庫本	⑨狂言集成	⑩狂言大全集
狸腹鼓	×	×○	—	—	—	○	—	—	○	×
樽聳	—	—	×	×	○	○	—	○	○	—
児流鍋馬	—	—	○	○	×	○	—	—	○	—
千鳥	—	—	○	○	○	○	—	○	○	○
茶子味梅	—	—	○	○	○	○	—	—	○	—
茶壺	○	○	○×	○	○	○	○	○	○	○
苞山伏	—	×	×	—	×	×	×	×	○	×
釣狐	—	○	○×	—	—	○	—	○	○	○
釣針	—	—	×	×	○	○	—	○	○	○
飛越	○	○	×	×	○	○	○	○	○	○
井礪	—	○×	×	—	○	○	—	○	○	○
吃り	—	—	○×	○×	—	○	—	○	○	○
鈍根草	—	—	○	×	×	○	×	×	○	—
長光	—	○	○	○	—	○	○	○	○	○
泣尼	—	○	○	○	—	○	—	○	○	○
長刀会釈	—	○	○	×	×	○	○	—	○	—
腥物	—	—	○	○	○	○	—	○	○	—
成上り	—	—	×	×○	×	×	×	×	○	×
業平餅	—	—	—	—	○	○	—	○	○	○
鳴子	—	◎	○	○	○	○	—	×	○	—
鳴子遣子	—	—	○×	○×	○	○	○	○	○	—
縄綱	—	○●	○	○	○	○	—	○	○	●
仁王	○	○	○	○	○	○	—	●	○	○
二九十八	—	○	○	○×	○	○	—	○	○	○
寝音曲	—	×	×	×	×	×	—	×	○	×
禰宜山伏	—	—	○	○	○	○	—	○	○	○
伯養	—	—	×	—	—	×	—	×	×	○
花折	◎	—	○	○	○	○	○	○	○	○
花子	—	●	○×	—	—	○	—	●	○	—
腹不立	—	—	×	×	—	×	—	×	○	×
簸屑	—	○●	—	—	○	○	●	—	○	—
引敷聳	—	—	○	○	○×	○	×	○	○	—
人馬	—	—	○	○	○	○	○	○	○	—
樋の酒	◎	◎	○	○	○	○	—	—	●	—
武悪	—	○	○	○	○	○	—	○	○	○
吹取	—	—	○	○	○	○	—	—	○	—
附子	○	○	○	○	○	○	○	○	○	▲
二人大名	—	—	○	○	○	○	—	—	○	○
二人袴	—	○	×	×	—	○	○	○	○	—
仏師	—	—	○	○	—	○	○	○	○	○
文荷	●	●▲	○	○	▲	○	—	○	○	▲
棒縛	●	○	○	○	○	○	○	○	○	▲
謀生種	—	—	×	×	—	×	—	×	○	○
庖丁聳	—	○	×	×	×	○	—	×	×	○
骨皮	—	—	×	×	×	○	○	—	○	○
盆山	—	○	○	○	○	○	○	○	○	○
鞠座頭	—	—	○	—	—	○	○	○	○	—
水掛聳	×	×	×	×	○×	○	○	○	×	—
不聞不見	—	—	×	—	○	○	—	○	○	○
水汲新発意	—	—	×	○×	○×	×	—	×	×	—
胸突	—	●	×	×	○●	○	—	●	○	●
貰聳	×	—	×	×	—	○	×	×	×	—
瘦松	—	—	○	○×	○	○	—	○	○	○
雪打	—	—	○	○	○	○	○	—	○	—
弓矢太郎	—	—	—	—	○	○	○	—	○	○
横座	—	—	×	×	—	○	○	○	×	—
呼声	—	—	—	—	—	—	—	—	×	●
鎧	—	—	○	○×	×	○	×	×	×	—
連歌十徳	—	—	—	—	○	○	○	—	×○	—
連雀	—	—	×	×	—	×	×	—	○×	—
六地藏	—	—	○	○	○	○	○	—	○	○
呂蓮	—	—	×	×	○×	●	—	○	×	●
若和布	—	—	○	○	○	○	—	—	○	—

と現在上演されている「飛越」の三七曲とし、「②馬瀬資料」は馬瀬狂言保存会所蔵資料、または個人蔵の台本類である。

また、⑤明和中根本、⑦和泉流秘書、⑧古典文庫本、⑩狂言大全集については、これまでの調査で和泉流諸本の中でも馬瀬狂言資料との共通性が指摘されたものである。⁴

表中の記号は次の通りである。

●…「先づお待ちなされませ」と呼びかけた後、追う相手に対してからかいなどの言葉をかける形

▲…「先づお待ちなされませ」という台詞はないが、追い込みを止め、追う相手に対してからかいなどの言葉をかけていると考えられる形

◎…「先づお待ちなされませ」と呼びかけた後、追う相手に対して改めて「お許しなされませ」と許しを乞う形

○…通常の追い込み

×…追い込み以外の止め

…その曲が所収されていない、または終曲部の演出が明確に記されておらず判断できないもの（省略などを含む）

なお資料によっては、複数の止めの形を記したものもあり、その場合は両方を示した。

さて、これらの調査により、追い込みとなる曲の中で、追い込みを一旦止める形を持つものの割合を調べ、結果をまとめたものが表2である。

これによれば、①馬瀬現行では、●印と▲印を合わせた割合が二二・二％、更に◎印を含めると三八・九％、②馬瀬資料では、●印・▲印の曲が一三・七％、◎印を含めると一七・六％と、馬瀬狂言資料全体では●印、

表2 追い込みを一旦止める曲の数と割合

	①馬瀬 現行	②馬瀬 資料	馬瀬狂言 全体	③天理本	④和泉家 古本	⑤明和 中根本	⑥波形本	⑦和泉流 秘書	⑧古典 文庫本	⑨狂言 集成	⑩狂言 大全集
追い込みで終曲 となる曲の数	18	51	53	68	65	79	109	52	78	108	76
追い込みを止め て言葉をかける 曲の数 (●▲) と割合	4	7	9	0	0	3	2	3	10	1	8
	22.2%	13.7%	17%	0%	0%	3.8%	1.8%	5.8%	12.8%	0.9%	10.5%
追い込みを止め て許しを乞う曲 の数 (◎) と割合	3	2	4	0	0	0	0	0	0	0	0
	16.7%	4%	7.5%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
合計	7	9	13	0	0	3	2	3	10	1	8
	38.9%	17.6%	24.5%	0%	0%	3.8%	1.8%	5.8%	12.8%	0.9%	10.5%

▲印、◎印の曲を合わせると二四・五%となり、和泉流諸本の中で、最も数値の高い⑧古典文庫本の約二倍で、特徴的な傾向を示していると言える。特に現行曲ではその傾向が強く認められる。また、追い込みを一旦止め、改めて許しを乞うという◎印の曲は馬瀬狂言資料にしかなく、こうした演出を好んで行っていた可能性が指摘できよう。

一方、和泉流諸本をみると、数値の高い順で、⑧古典文庫本が一二・八%、⑩狂言大全集が一〇・五%、⑦和泉流秘書が五・八%と、馬瀬狂言との関連性が指摘されている資料の数値が高く、こうした観点からも、両者の関連性（あるいは台本の成立時期の時代性か）があることが窺えよう。それでは、各曲について資料毎に分析を進めることにする。

二 各曲の分析

まず、追い込みを止めて言葉をかける曲（表中の記号では●▲印）は、今回の調査で39例確認できた。その内容を分析すると、大きくは次の三種類に分けられる（なお、曲によっては、台本毎に内容が異なる場合もあるため、該当する諸本の略称も併せて掲げた）。

馬現：馬瀬現行 馬：馬瀬資料 明：明和中根本 波：波形本
秘：和泉流秘書 古：古典文庫本 集：狂言集成 全：狂言大全集

〈分類A〉

追ってきた相手に対して、追い込み前までの場面で用いた表現や行為を再提示して言葉をかける（からかいや挑発の意を込める）曲（26例）

「内沙汰」（古） 「伯母が酒」（馬）
「瓜盗人」（馬現・馬・全） 「清水」（馬現・古）

「宝の笠」（秘・古） 「附子」（全）
「縄綱」（馬・全） 「文荷」（馬現・馬）
「仁王」（古） 「棒縛」（馬現・全）
「花子」（馬） 「胸突」（馬・明・古・全）
「簸屑」（馬・秘） 「呼声」（全）
「樋の酒」（集）

〈分類B〉

追ってきた相手に対して、自分の行為をごまかす、あるいは責任転嫁するなどの言葉をかける曲（11例）

「石神」（波・古） 「墨塗」（古）
「因幡堂」（明・秘・古） 「文荷」（馬・明・全）
「金岡」（古） 「呂蓮」（全）

〈分類C〉

追ってきた相手に対して、懇願する曲（2例）

「花子」（古） 「呂蓮」（波）

これらの結果（表3参照）から、全体の約三分の二に相当する数がAに分類され、更に馬瀬狂言資料十二例中十一例とほとんどがAとなっていることがわかる。まずは、馬瀬狂言資料を含んだものについて、台本の数が多い曲から取り上げることとする。

（1）「胸突」・「文荷」

こうした追い込みを一旦止める曲がいつ頃からあるのか明確ではないが、時代が古いものとして注目されるのが、⑤明和中根本を含んだ「胸突」と

表3 追い込みを止めて言葉をかける曲(●▲)の分類
(表1から該当例を抽出し、分類の記号に直したもの)

曲名	①馬瀬現行	②馬瀬資料	⑤明和中根本	⑥波形本	⑦和泉流秘書	⑧古典文庫本	⑨狂言集成	⑩狂言大全集
石神	—	—	×	B	—	B	○	○
因幡堂	—	○	B○	○	B	B○	○	○
内沙汰	—	—	×	○	—	A	×	×
瓜盗人	A	A	○	○	○	○	○	A
伯母ヶ酒	—	A	○	○	—	○	○	○
金岡	—	—	—	○	—	B	○	—
清水	A	○	○	○	○	○A	○	○
墨塗	—	—	—	○	○	○B	○	○
宝の笠	—	—	○	○	○A	A	○	×
縄綱	—	○A	○	○	—	○	○	A
仁王	○	○	○	○	—	A	○	○
花子	—	A	—	○	—	C	○	—
簸屑	—	○A	○	○	A	—	○	—
樋の酒	◎	◎	○	○	—	—	B	—
附子	○	○	○	○	○	○	○	A
文荷	A	AB	B	○	—	○	○	B
棒縛	A	○	○	○	○	○	○	A
胸突	—	A	○A	○	—	A	○	A
呼声	—	—	—	—	—	—	×	A
呂蓮	—	—	○×	C	—	○	×	B

「文荷」である。

「胸突」では、四本に共通する追い込みが認められる。まず⑤明和中根本では、通常の追い込みの記事と共に、

アト「やるまいそく」ト云テ追込也 先待と如常二下ニ居テ留テ、一ノ松ニ而借錢ハ
サラリくト引サク仕様もアリ⁵⁾

と、傍線部の通り、別演出として、追い込まれる途中で一旦「先待」と止め、一ノ松で借状を引き裂き、再び追い込まれる形が示されている。この曲は、男に金を貸していた貸し手が返済を求め、男ともみ合いになったところ、男は胸を突かれたと大騒ぎし、貸し手からままと借状をせしめて引き裂き、胸が痛いのは嘘だと明かして逃げていく話で、その終曲で、貸し手に対して、からかうように男が再度借状を引き裂く所作がなされた(または、この時点で借状を引き裂く演出であったか)ものと考えられる。こうした流れを引き継いだのが、以下の三本の演出と言えよう。

②馬瀬・『狂言六義』(中屋豊和7ノ3)⁶⁾

「扱くにくいやつのおのれ其儘ておかうか」「ア、先待せられく」「待とハ何と」「借金ハささりく済たそやく」「あの横着者やるまいそく」「すんたそやく」

⑧古典文庫本

アト「扱く憎い奴の 追廻す シテ」「是は何とおしある アト」「何とくいふ事
が有者かおのれ打殺してくれう シテ」「ア、先お待ちあれ先おまちあれ アト
「まてとは何と シテ」「借錢はささりく 借状破り捨ル アト」「おのれまだ其つ
れをいふか シテ」「済だぞやく」 アト」「何といふともとらずにはおくまいぞ

シテ「済だぞく」 アト「あの横着者やるまいぞく」

⑩狂言大全集

扱ゝにくいやつ、その儘でおこうか ア、先つお待ちやれ 待とハなんと
借銀ハさりと済たぞく アノおゝちやくものやるまいぞく

なお、⑧古典文庫本には、他にも「替の止」として、シテがアドを止めた後に、「余り其様におせあるな、まだ胸が痛うなるぞや」という台詞の別演出も記されている。

台詞に多少異同はあるが、いずれも共通した形と言えよう。「さらりく」という台詞と共に、⑧古典文庫本の記事通り、借状を破る演技がなされていることが推測される。②馬瀬・『狂言六義』は、馬瀬狂言資料の中でも最も古い文化二年の奥書があり、馬瀬でもこうした演出を古くから行っていたことが認められる。

「文荷」については、①馬瀬現行の形は冒頭に掲げた通りで、Aに分類されるが、他本では異なる分類となる。

⑤明和中根本⁷

二郎「ゆるさせられく直ニ追込、シテ柱マテ行、アト迹る内ニ脇座ニテシテ文ヲ下ニ置トクトノハシ文ヨツクル 「ヤイそこなやつ 「ハア 「己ハそこに何として居、悪イヤつの 「ハア是か少人の御返事でござります 主「何の御返事、悪イヤつの 太「ゆるさせられく 「あの大ちやくものやるまいぞく
「ゆるさせられく 追込也

⑩狂言大全集

やるまいぞく カツキ 頼ふた御人、是ハ正身の御返事で御座る エ、又其

連を云ぞ 免させられいく アノおふちやく者やるまいぞく

いずれも、次郎冠者が先に逃げ、その後太郎冠者が、主に対して、破いた手紙を恋文の相手である少人からの返事とごまかして逃げ込む形で、分類としては、Bに該当しよう。太郎冠者・次郎冠者の二人が時間差で逃げることで考えられた演出とも言える。

これらの資料に比して、①馬瀬現行の形では、少人からの返事とごまかした後、更に主をからかう台詞が付加され、追い込む時間がより長くなり、主に対する太郎冠者・次郎冠者の横柄さ、図々しさも強調されることになる。②馬瀬資料は三種あり、その内二種の資料は①馬瀬現行と共通するが、天保十三年奥書の『鬼瓦の外八番』（中北小すゑ23）には「是か正真の御返事で御座る」とあり、⑩狂言大全集の形と共通するものが認められた。馬瀬では、A、B両方の形がありAの形が定着したようである。

（2）「縄綯」・「瓜盗人」・「簸屑」

「縄綯」・「瓜盗人」は、共に②馬瀬資料と⑩狂言大全集に用例がある。

まず「縄綯」の②馬瀬資料は三種あり、年代が明らかな資料二種をここに掲げた。資料Aが文政十四年に書写された記事を有するもので、資料イは大正六年に写された台本である。

②ア馬瀬・『八句連歌他一二番』（中北小すゑ別口5）

ああゆるさせられく まだそこををるか ゆるさせられく あのをうちやくもの 先またせられ まてとハ何 ゑたくゝゑた まだ其つれをゆう あゝゆるさせられく やるまいぞく ゆるせられく

②イ馬瀬・『縄なひ』（河原良治氏蔵）

か「まだそこに居か 太「ゆるさせられ〜」 か「あの大着者やるまいぞ、
〜 太「先またせられ か「待とは何と 太「大きな口へ紅をちよひと

⑩狂言大全集

アゝゆるさせられ〜 やるまいぞ〜 アゝ先お待やれ まてとハ エた
か〜大笑 アゝゆるさせられ〜

この曲は、博打好きの主が借金のかたとして、働き者の太郎冠者を借金相手の何某に差し出すが、何某宅でそのことを知った太郎冠者は全く働かず、困った主は、再度家に戻して、その働きぶりを何某に見せようとする。帰宅が叶った太郎冠者は大喜びで、主の前で何某の悪口を言いながら縄を緋い、途中から主と入れ代わった何某に追い込まれることとなる。

②ア馬瀬・『八句連歌他一二番』と⑩狂言大全集にみえる「ゑた〜」

「エたか〜」は、何某の妻が歩く様子をあひるの歩く様に喩えた表現で、太郎冠者が何某宅の悪口を連ねる話の中に出てくるものである。この台詞も、何某に対するからかいの言葉と認められる。②イ馬瀬・『縄なひ』では、その箇所が「大きな口へ紅をちよひと」と妻の容貌の悪口となり、内容が異なるものの、同様にからかうことを主眼としたものとみて差し支えないであろう。

また、「瓜盗人」もすでに拙稿に示した通り、いずれの資料（①②⑩）とも共通した形が認められ、盗人が畑主と綱を引き合い、途中で放す。これは直前に演じられた、祭りの稽古の演技を繰り返しつつ、それを逆手にとって、盗人が畑主を転がすことになる。

一方「簸屑」は、②馬瀬資料と⑦和泉流秘書に共通する形が認められる。

②馬瀬・『鬼瓦の外八番』（中北小すゑ²³）

又直ニ追込ミニテモスル 一ノ松にて 先まで〜 待とは 何とも一さし
舞ふか又ねむらぬか

⑦和泉流秘書

次「アゝゆるしてくれい〜 太「やるまいそ〜 次「アゝ先待て〜 太
「待とハなんと 次「最一さし舞ふか も一ねいりせぬか 太「己また其つれ
をいふか 次「アゝゆるして呉い〜 太「やるまいそ〜

②馬瀬・『鬼瓦の外八番』では、別演出の形で書き留められたものであるが、次郎冠者が、茶を挽きながら居眠りする太郎冠者をからかう台詞（傍線部）がいずれの資料にも認められる。

これまでの例は、各資料とも分類が共通するものが多かったが、一方で馬瀬狂言とは少し異なる形も認められる。

（3）「清水」「花子」

「清水」と「花子」は、①馬瀬現行（「清水」⁹）、②馬瀬資料（「花子」）と⑧古典文庫本が該当する。

「清水」は、野中の清水に水汲みに行きたくない太郎冠者が、そこに鬼が出たと作り話をし、やってきた主を鬼の面をかぶって脅すが、主に見つかり追い込まれるという展開となる。①馬瀬現行の終曲部では、鬼に扮した時の太郎の台詞である「取ってかもう」（傍線部）を繰り返すことで、主をからかう。

主「また其ここに居るか 太「許させられ許させられ 主「おのれを何んと

してくれよう知らぬ 太「先づお待ちなされませ 主「待てとは何んと 太「取ってかもう 主「まだ其のつれを言ふ 太「はゝあ許させられ許させられ 主「あの横着者やるまいぞやるまいぞ 太「許させられ許させられ 主「やるまいぞやるまいぞ

この曲とほぼ同じ演出が、次の②馬瀬・『狂言』の「伯母が酒」にも認められる。この曲も酒屋を営む伯母を鬼の面を被って脅す酒好きの甥の話で、同じ趣向を持つことから取り入れられた演出と推測される。

②馬瀬・『狂言』（中林武一30ノ14）「伯母が酒」

「アゝ先待せられい」「待とハなんと」「とつてかもう」「なんのとつてかもう」「アゝゆるさせられく」「やるまいぞく」（後略）

一方の⑧古典文庫本では、「極傳ノ仕方」として、

一 此狂言極傳ノ仕方 ゆるさせられく おのれ何としてくれうぞ ごゆるされませく 扱ゝ憎いやつの（中略） アゝ先お待なされませト云テ止 待とは何とト云 太郎 彼お約束の酒をお忘れなされますナト云 おのれまだ其様な事をぬかしおるト云テ追込 太郎笑 ごゆるされませくト云テ入也

追い込みを一旦止めた後の太郎冠者の言葉は、鬼の姿で主を脅した時に交わした約束（傍線部）を繰り返す。台詞の内容は異なるが、主に対してのからかいであることは、古典文庫本のト書きの記述通り、「笑」ってなされていることから明らかである。

このように「清水」の場合は、詞章は異なるものの、太郎冠者が鬼に扮した時のことを繰り返し、再び追い込まれることになる。

一方、妻に愛人の元へ行っていたことが見つかった男が追い込まれる「花子」では、台本によって描き方が異なる。

②馬瀬・『狂言花子』（明治二十六年本・中林慶三30ノ17）

女「まだそこにおるか 主「ゆるしてくれい」 女「おのれおなんとしてくりよう 主「先までく」 女「まてとハなんと 主「花子様 女「なに花子様うめとゆゑく」 主「様め 女「エア腹立やく」 主「ゆるしてくれく」 女「やるまいぞく」（後略）

⑧古典文庫本

立テ常ノ追廻シノヤウニグル（中略） 女「エ、腹立や、わらはがしるまいと思ふか、有様にいはぬかいやい」 女ツヨクセメヨル シテ「ア、先おまちあれシテ柱ノ先ニテ膝ツキ 女「まてとは シテ「さうあらば最早おこらへあつたもれ 拜ム 女「エ、腹立や、何としてくれうぞ 追 シテ「ア、ゆるしておくれあれ 逃込

②馬瀬・明治二十六年本では、シテが「花子様」と言葉をかけ、女はシテに「花子様め」と言わせようとするが、シテは「様め」としか言わず、女に反抗しながらも、従わざるを得ないシテの様子が窺える。「千切木」の後半、シテは自分に乱暴を働いた相手呼び出す際に、女から相手の名前に「め」をつけることを迫られ、しぶしぶ後から「め」だけを叫ぶシテの姿と重なる。

一方の⑧古典文庫本では、傍線部の通り、女に対して、「拜」んで許してもらおうとするシテの恐妻ぶりが描かれ、分類はCに該当する。こうした追う相手に対して詫びる形は⑥波形本「路蓮」にも確認ができる。

ヲイ廻し シテ「ハ、ア先お待ちやれ トシテ柱ニテ片ヒザツキワビテモ聞ス 女
「待と云事が有物かもとのやうにしてかへせ」トヲイ込ナリ

しかし、勝手に夫の頭を剃られたと思ひ込む妻は納得せず、こちらは待つこともせずに追い込んでいる。

このように、自分が追われる状況に窮し、相手に許して貰おうとする姿勢は自然な流れでもあるが、こうしたCの形よりも実際にはAの形が多い。

(4) 「棒縛」

「棒縛」は、①馬瀬現行と⑩狂言大全集に認められる。主の留守中に盗み酒をするため手を縛られた太郎冠者・次郎冠者が、それでも酒を飲もうとするところにおかしみがある曲であるが、①・⑩の資料共に途中で縄を解いての酒宴という展開となる（他家では、縄を解かずそのまま酒を飲むことが多い）。

①馬瀬現行

主「まだそこにおるか」 太「御許されませ 御許されませ」 主「己何としてくれよう知らぬ」 太「先づお待ちなされませ」 主「待てとは何んと」 太「うちの者かな」 主「まだそのつれを言ひやる」 太「御許されませ 御許されませ」 次「ちやっと来い ちやっと来い」 主「やるまいぞ やるまいぞ」 両人「御許されませ 御許されませ」

⑩狂言大全集

己れマくいやつマの ア、ゆるさせられく ホマ壺つお上り被成ませぬか 己れ
またその連を言う ア、ゆるさせられいく アノお、ちやくものやるまい

ぞく やるまいぞく

①馬瀬現行の傍線部は、直前に謡った「月は一つ、影は二つ、満潮の夜の酒盃に主をのせてん主とも思はぬうちの者マのかな」の一部を繰り返したもので、⑩狂言大全集は、「一ついかがか」といった内容で、いずれもまだ酒宴が続いているかのような対応となっている。

和泉流諸本では、Aの割合が多いものの、異なる分類に該当するものも認められる。そこで、次に和泉流諸本での例を確認していくこととする。

(5) 和泉流諸本の形

先の馬瀬狂言資料と共に取り上げられなかった和泉流諸本の曲について、分類順に分析していく。まずAと認められる曲は、次の六曲である。

〈分類A〉

a 「宝の笠」

まずは、「宝の笠」である。他流では「隠笠」と称されるこの曲は、鬼の宝物の一つである隠れ笠として、古笠を売られた太郎冠者が主に取り繕うとするが、結局露見して、追い込まれるものである。⑦和泉流秘書と⑧古典文庫本にこの演出が認められ、⑦和泉流秘書は、曲の終わりに記された傍注で、別演出を記したものと思われるが、両者の詞章は共通しており、追ひ込みの途中で偽物の古笠を被って、姿が見えないだろうと主張している太郎冠者を描く。

⑦和泉流秘書

ア「やるまいそく」 シ「ゆるさせられく」

先御待被成ませ 待とハ何と 何んと見へますまいかの

⑧古典文庫本

追廻ス（中略）アト「おのれ何としてくれう シテ「先お待なれませく」 アト
「まてとは何と シテ「左ノ方ヲ笠ニテ隠シ 見えは致すまい アト「まだ其つれ
をいふか シテ「ア、ごゆるされませく」 アト「扱、憎いやつの シテ「ご
ゆるされませく」 アト「やるまいそく」 ト云テ追込也

b 「内沙汰」 (⑧古典文庫本)

「内沙汰」は、妻と共に公事（裁判）の稽古をしていたシテがいつしか
本物の公事と勘違いし目を回し、妻に介抱されて正氣に戻ると、公事の相
手である右近と妻との仲を疑い、指を差して非難し、妻に追い込まれる。
「それあさした」は、妻を笑いながら指差して挑発することばである。

シテ「ア、是は何とする 女「何と、いふ事が有者か シテ「先まてく」 女
「まてとは何と シテ「それあさしたは笑 女「エ、腹立やく喰さかうか引
裂うか（後略）」

c 「仁王」 (⑧古典文庫本)

⑧古典文庫本には、もう一曲「仁王」がある。打ち負けた博打打ちがに
せの仁王像に化けて、一儲けを企むが、一度は信じた参詣人たちもおかし
いことに気づき、追い込むことになる。

二「扱、憎い奴の シテ「ゆるして呉い」 頭「其刀をおこせ シテ「先ま
てく」 頭「まてとは シテ「此様な物はいらぬわいやいト云テ草履ヲ投出ス
頭「あの売僧どつちへ行おる誰もないか、捉へてくれいやい」 皆「やる
まいぞ」 二「早う捉へさせられく（中略） シテハ此様な物はいらぬわい

やいト云テ笑（後略）」

と、参詣人が仁王に寄進したものを、仁王に扮した男が投げ返す場面があ
る。これは、寄進する行為の逆を示すもので、男を追う参詣人の追及がよ
り激しさを増す展開となる。

d 「附子」・「呼声」 (⑩狂言大全集)

「附子」・「呼声」共に⑩狂言大全集に認められる。よく知られた「附子」
では、主に対して附子を一口食べないかと誘う詞章が認められる。これは、
先の「棒縛」の表現に類似したものとと言える。また居留守を使う太郎冠者
の姿を描いた「呼声」でも、傍線部の通り、本人がその場にいるにもかか
わらず、留守を主張する台詞となっている。

「附子」

やるまいぞく ちやと行ケく カツキ 一口あかりませぬか エ、また其
の連な事を ア、ゆるさせられい」 やるまいぞく アノお、ちやくもの

「呼声」

ア、ゆるさせられく やるまいそ 先つ待たせられい 待とはなんと 留
守で御座る笑 おのれまたその連をいふ ア、ゆるさせられい」 あの大
ちやく者やるまいそく

これらの太郎冠者には反省の色はみえず、むしろ主の怒りを買った行為を
面白がっているかのような印象を観客に与えるものだろう。

e 「樋の酒」(⑨狂言集成)

この他に、⑨狂言集成での唯一の例が「樋の酒」である。この曲は別々の蔵にいた太郎冠者と次郎冠者が樋を掛け渡して、酒盛りに興じる曲である。

アド「憎い奴の。シテ「あゝ先づお待ちなされませ。アド「何と待てとは。シテ「泉の壺で御座るに依つて。飲めども尽きる事では御座らぬ。アド「まだそのつれをぬかしをる。あの横着者。やるまいぞ」。ト云うて。追込み入る。

一旦止めた後の太郎冠者の言葉は、酒宴で謡っていた「邯鄲」の「よも尽きじ薬の水も泉なれば」にこと寄せてごまかしたものである。またこの曲は、④和泉家古本にもあり、

主「(中略)マフテイルヲミテ・肝ヲツフイテ・にくいやつト云テ追マハスシテ「いや目出たい事か御さるト云 主「何事しやト云 シテ「此つほは泉て・のめ共くめともつきまらせぬ・お家御はんしやうの瑞相て御さるト云 主「あのにくいやつかト云テ留ル也」又相舞ノ内ニ主出テ・其儘追入モ有ヘシ

と、「追マハス」という語の後に、「汲めども尽きない泉だから」と言い訳する詞章が認められることから、⑨狂言集成と共通する演出であった可能性も考えられよう。

〈分類B〉

Bに分類されるものとして、初めに「因幡堂」・「石神」・「金岡」を取り上げる。いずれも夫婦物で、「因幡堂」と「石神」は離縁をテーマとしている。

a 「因幡堂」

まず「因幡堂」は、酒飲みの妻を持った男が、妻が実家に戻っている最中に離縁状を送り、そのまま因幡薬師に申し妻を願うが、その企みが妻に露見し、追い込まれるという曲である。この中では、一度離縁したはずの妻に再度娶せられて、因幡薬師への不満を述べるシテの台詞が、追い込みの途中で挟まれる。⑤明和中根本では、別演出の形で示されているが、後続の台本類にも共通する詞章が確認できる。¹⁰⁾

⑤明和中根本

シテ「ア、ゆるしてくれ」ト追廻シニモスル、スグニ追込ニモスル、一ノ松ニテ先待ト留テ、是ハ薬師如来も聞ぬ事しやト云仕様も有

⑦和泉流秘書

シ「ア、先待て」女「待とハ何と シ「ア、御薬師もきこへぬ物ぢや 女「エイ腹立や」また其つれを言ふか(後略)

⑧古典文庫本

シテ「ア、先まで」ト云テ両手差出ス アト「待とは何と シテ「是は又お薬師も聞えぬ事ぢや アト「エ、まだ其つれをいふか何としてくれうぞ(後略)

b 「金岡」(⑧古典文庫本)

「因幡堂」と同様に、不満をもらすのが、「金岡」である。この曲は、高名な絵師の巨勢金岡が宮中の上臈に恋をし、そのことに気づいた妻が、絵師の腕で自分をその女性に似せて絵取ればよいと提案し、試してみたものの、全く似ることはなく失望するという話である。

アト「腹立や〜」 シテ「先お待あれ〜」 アト「まてとハ何と」 シテ「おぬ
しの様な黒ひ顔はどうも似ぬわいな」 アト「エ、腹立やまだ其つれをいふか
シテ「さうあらバ最早ゆるしておくれあれ〜」(後略)

傍線部の表現は、シテの開き直りとも受け取れる言葉ながら、シテ自身
が妻の顔を彩りながら歌う内容（「紅や白粉すりぬりたれど、下地は黒き山が
らすの、よそにも人や笑ふらん」）に重なり、観客の笑いを誘う。

c 「石神」

「石神」は、妻が夫と離縁するかどうか、出雲路の夜叉神に尋ねに赴く
と、夜叉神になりました男が偽りのお告げを示すが、妻の神楽に浮かれ
て企みが露見する。⑥波形本と⑧古典文庫本に認められ、いずれも石神に
かこつけてごまかす内容で、男のいい加減さを強調しつつ、妻の怒りをか
き立てるものとなっている。

⑥波形本

ヲイ廻し シテ「先まて〜」 女「待とハ」 シテ「正神の石神しや程に是程の
きどくは有ふ」 女「またそのつれをいふか腹立や〜」 トヲツテ入ル

⑧古典文庫本

女「エ、腹立や〜」ト云ナガラ脇座ノ方へ追テ行 シテ「ア、先まて〜」ト云
ナガラ両手ニテ止ル 女「まてとハ何と」 シテ「余のお神楽が面白さに石神も
感応あつたわいやい」ト云ナガラ面ヲ両ノ手ニ持右ノ方へサシアゲ見スルト
女「弥腹立踏ナラシ」 エ、腹立やおのれまだそのつれをいふか シテ「最早ゆ
るしてくれい〜」(後略)

この後の注記として、

是〜「正真の石神は爰にござるト云ナガラ面ヲ両手ニ持、右ノ方へサシアゲ
見スルト、女イヨ〜腹立追入也

⑧古典文庫本には二種類の詞章が示されて、いずれも傍線部の通り、妻を
より怒らせる演出であることがわかる。

d 「墨塗」(⑧古典文庫本)

「墨塗」は、帰国することになった大名が馴染みの女に別れを告げると、
女は涙を流す。が、供の太郎冠者は、女の涙が偽りであることに気づき、
大名に報告する。大名が信じないため、女の使っている水入れを墨の入っ
たものと取り替え、女の嘘が露見し、そのことを知られた女が怒り、追い
込む話である。別演出の形で、

一 シテ逃入時一ノ松ニテ シテ「先まて〜」 女「待とハ」 シテ「余り深う
泣バ黒い涙もづるわいの」 女「エ、腹立やまだ其つれをいふか」 ト言テ追込
タル例モアリ

傍線部の通り、ひどく泣くと黒い涙もでることになると、大名が女に厭味
をいう詞章が確認できる。

e 「呂蓮」(⑩狂言大全集)

「呂蓮」は、旅の僧に夫が剃髪することを頼み、それが済んだところに
妻が戻り、僧に対して元に戻すよう、責め立てる。追い込まれた僧は、髪
は生えるものと開き直り、妻の怒りはエスカレートする。

エ、腹立や／＼元のやうに毛をはやしてかへせいやい／＼ ア、先お待ちやれ
待とハなんと 其様においやるな、はゆる時ハはやうわい エ、また其連を
ゆふ喰付てのけふか曳さいてのけふか腹立や／＼ ゆるして呉れい／＼

このように、和泉流諸本では、追われた者が追い込みを止めてかける言葉は多様で、特に⑧古典文庫本は、分類Aが五、分類Bが四、分類Cが1と、バラエティーに富む。こうした曲の数や全体の割合では、⑧古典文庫本の用例数は多いが、馬瀬狂言資料との近さという点では、分類Aの割合が多い⑩狂言大全集がより共通性があると言えようか。

(6) 追い込みを止めて許しを乞う曲(◎印)について

追い込みの途中で「先ずお待ちなされませ」と言葉をかけつつも、許しを乞うという◎印の曲は、馬瀬狂言資料にしか認められないものである。

この形に該当する曲は四曲(「鳴子」「樋の酒」「花折」「止動方角」)あり、ほぼ共通の形であるため、「花折」(『馬瀬狂言集』所収)のみ提示する。

住「まだそこにあるか」 新「許させられ 許させられ」 住「おのれを何と
してくれようかしらん」 新「先ずお待ちなされませ」 住「待てとは何とう」
新「お許しなされませ お許しなされませ」 住「やるまいぞ やるまいぞ」
新「許させられい 許させられい」

この曲は、新発意が住持から寺の花見禁制を命じられる。仕方なく寺の外で花見の酒宴をしていた一行を、新発意は中に招き入れ、一緒に酒宴を楽しむ、そこへ住持が戻って追い込まれる話である。

この新発意は、一行の帰り際に土産として桜の花を折って渡すほど、酒

に酔う様が描かれる。このように、「止動方角」を除いた三曲では、いずれも追われる者は酒に酔った態となる。こうした中、追い込みの最中に許しを乞うことで、主の怒りを買ったという現状を認識しながらも、やはり酔ったままの態で逃げていくところに、可笑しみが感じられよう。また酔った者の呼びかけに応じることで、追う者の緊張感が緩む間を作り出し、展開に緩急がつく効果もあろう。

もう一つの「止動方角」の太郎冠者は、人使いの荒い主に対して、借りてきた馬で意趣返しをし、最後は逃げた馬と間違えて、主に馬乗りになるといった状況での追い込みとなる。すでに主に対して優位な立場にあることから、許しを乞うのみという流れは自然なものと言えよう。こうした流れは、先述の分類Cの形で、何とか許してもらおうと言葉を重ねる演出に通じるところがあるのではないだろうか。

三 まとめ

以上のように、追い込みを一旦止めるという演出は、明和中根本以降の諸本(中でも馬瀬狂言資料との関連性があるとされた古典文庫本、狂言大全集、和泉流秘書に多く)で確認されるものながら、こうした演出を多用してきたところに馬瀬狂言の特徴があると言えるだろう。これらの曲の分類ではAがほとんどで、また追い込みを止めて許しを乞う形の曲が馬瀬狂言のみにあることも注目すべきと考える。

こうした演出を行うことで、どのような効果をねらっていたのだろうか。まず曲の構成として、通常の追い込みの型に変化をつけることで、展開のマンネリ化を防ぐことが考えられる。通常の追い込みに比べ、スピード感はなくなるものの、追う者と追われる者のやりとりの応酬は、終曲まで

観客の興味を引くものとなろう。

また、内容面での効果としては、追われる側が一度立ち止まり、追う者から叱責されたことを再び持ち出し、言葉やしぐさで表現することで、追われる側のしつこさ、図々しさ、懲りない性格が印象づけられる。また追う側からしてみれば、そうした行為はより怒りを増幅させる契機となり、追いつみの激しさも一段と増し、両者の演技はいずれも笑いにつながるものとなろう。

馬瀬狂言がこうした演出の形を多く残した理由として、これまで上演曲として番外曲を積極的に撰取した姿勢と通じることを指摘してきた。¹¹ 常の型に変化をつけるという点では十分に考え得ることであろう。更にこうした傾向を強めた理由として挙げられるのが、馬瀬狂言資料に多く認められる、曲の簡略化である。曲の簡略化は、芸の伝承や上演時間の短縮をしやすくするという利点はあるが、逆にやりとりが少なくなること、単調な展開にもなりかねない。そこで、曲の簡略化を行う中で、少しでも曲の展開に変化をつけるために、終曲部に追いつみを止める演出を多用することになったのではないだろうか。現行曲にこの形が多くみられるのは、この形が定着したことで、馬瀬の人々の好みに合致したことが推測される。そして、多い時には日に十番以上上演するといった馬瀬狂言の舞台で、常の型と異なるこの演出が取り込まれることは、より効果的であったと思われる。

この点について、馬瀬狂言の上演資料を確認すると、上演回数が多い曲（10回以上）は次の通りである。¹³

（ゴシック体は、追いつみの途中で動きを止め、言葉を交わす演出が馬瀬で認められた曲。*印は小名狂言。）

16回 三人片輪

15回 法師が母

14回 瓜盗人* 隠狸* 文荷*

13回 金岡 止動方角* 空腕* 千鳥*

12回 通円 不見不聞 楽阿弥

11回 膏藥煉 宗論 縄綯* 棒縛*

10回 佐渡狐 素袍落* 章魚 吃り 鈍太郎

ここに掲げた二・三曲中、九曲が小名狂言（*印）であり、その中の五曲に先の演出が認められる。この結果からも、馬瀬の人々が一旦止める追いつみの形に興じていた可能性が指摘できるのではない。また、上演回数が多いことで、曲に対する理解も深まり、芸の修得においても有効で、それがこうした演出の定着に繋がったことも推測される。

この演出は、中央の流派で演じられていたことが確認できることから、馬瀬狂言独自に考えられたものではない。が、現存する例の中には、馬瀬狂言の曲にしか認められない事例もあることから、馬瀬狂言で独自にこの形に改めた曲があった可能性も考えられよう。この点については、更に資料調査の範囲を広げ、確認していきたい。

おわりに

この追いつみを一旦止める演出は、和泉流諸本の中では古典文庫本に多くの例が認められた。馬瀬狂言に和泉流の詞章が定着した時期は、馬瀬村に野村玉泉が訪れた天保年間と伝えられているが、明確ではない。しかし馬瀬狂言資料の中にある文化・文政の年記を有する資料の存在や今回の結果を併せて考えると、古典文庫本の元となった雲形本に近い和泉流山脇派

の詞章が馬瀬に伝わり、定着した可能性を指摘できるのではないだろうか。数多くの曲を伝承し、上演してきた馬瀬狂言は、この地域の人々によってそれを維持するために独自の工夫がなされてきたと考えられるが、その一つがこの追込み込みに認められた演出だったのではないだろうか。

注

- 1 橋本朝生「狂言に見る男色」『国文学 解釈と鑑賞』平成一七年三月、『続狂言の形成と展開』（瑞木書房）所収
- 2 拙稿「馬瀬狂言における中央と地方」『昭和女子大学文化史研究』12 二〇〇九・三）、「馬瀬狂言資料の紹介（8）」「花子」について」『学苑』891 二〇一五・一）
- 3 本稿で用いた台本、参考資料は次の通りである。
天理本 『狂言六義』（天理図書館善本叢書23・24・天理大学出版部・一九七五）
『天理本狂言六義』（北川忠彦他校注・三弥井書店・一九九五）
『狂言六義全注』（北原保雄、小林賢次著・勉誠社・一九九二）
和泉家古本 『日本庶民文化史料集成 4 狂言』

（芸能史研究会編・三一書房・一九七五）

明和中根本 法政大学能楽研究所蔵

波形本 法政大学能楽研究所蔵の紙焼写真にて確認

『和泉流秘書』『和泉流狂言選 愛知県立大学附属図書館蔵』（島津忠夫、野

崎典子編・和泉書院・一九八〇）。『和泉流秘書』（愛知県立大

学附属図書館蔵）翻刻・解題一〜一二（野崎典子・小谷成子

『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』二（二〇〇一・三）

『愛知県立大学日本文化学部論集国語国文学科編』（二〇一二・

三）

古典文庫本 『和泉流狂言集』（古典文庫・一九五三〜一九六二）

狂言集成 『狂言集成』野々村戒三、安藤常次郎共編・能楽書林・一九七

四

狂言大全集 正式な書名は『祖家秘書狂言大全集』国立国会図書館蔵。

なお現行の演出については、十分な調査に至らず、今回は取り上げなかった。今後の課題としたい。

- 4 馬瀬狂言資料と共通性が確認できる台本類は、他に大蔵虎寛本と『狂言記』があるが、いずれも調査の結果、追込みを止めるという演出の該当曲がなかったため、今回は対象外とした。
- 5 本文の読解の便宜を図るため、適宜原文に読点や「の記号を付した。

- 6 馬瀬狂言保存会所蔵資料に付された所蔵番号である。

- 7 明和中根本には、「文荷」が二種類所収されているが、いずれも追込みを止める演出を有する。特に演者の動きが詳しいものを提示した。

- 8 拙稿「馬瀬狂言における中央と地方」（注2参照）に示した原文を再掲する。

・『馬瀬狂言集』所収の「瓜盗人」（一部上演時に確認したものにより改めた。）

盗「まづ待て、まづ待て 百「待てとは何と 盗「やつとなあ（綱を投げる） 百「何じややつとなあ（綱持つ） 盗「引けば 百「引けば 盗「ゆるむれば（綱を放す）、持って参たのう 百「あのおうちやく者、やるまいぞやるまいぞ。盗「ゆるしてくれゆるしてくれゆるしてくれ

・狂言大全集

先待て〜 待とハなんと 引ハ 引ハ ゆるすれハ、打もつてお参り

やつたな 大笑 扱、腹の立アノ大ちやくものとりゑてくれ ゆるせ〜やるまいぞ〜

- 9 馬瀬狂言では「鬼清水」の曲名を用いている。

- 10 ちなみに⑩狂言大全集は、

ハア引童に隙をくれよふも申づまを仕おつたなア〜 夫ハものじやものとハエ、いわぬかいやい〜 ア、先つ待て〜 まてとハ そちがまめなやうに薬師にきせいした エ、まだその連な事 ア、ゆるして呉れ〜（後略）

と、妻に対して、薬師に祈誓したとごまかす様子が描かれているが、その後追い込みとなっているようである。

- 11 拙稿「馬瀬狂言資料の紹介（1）―「狂言番組扣」を中心に―」（『学苑』696一九九八・二）、「馬瀬狂言資料の紹介（2）―台本に見える上演記録・曲名索引―」（『学苑』703 一九九八・一一）参照。注2の拙稿でも指摘している。

- 12 注8参照

- 13 すでに拙稿（注11）で上演回数については触れているが、その後確認された上演資料もあったため、改めて整理したものを示した。

〈付記〉

本稿を成すにあたり、貴重な資料の閲覧のご許可、並びにご高配を賜りました馬瀬狂言保存会会長河原良治氏をはじめ、会員の方々に改めて深謝申し上げます。また資料閲覧にご高配を賜りました法政大学能楽研究所にも御礼申し上げます。

本稿は、科学研究費基盤研究（C）「地方における狂言の伝承についての研究―馬瀬狂言資料を中心に―」の研究成果の一部である。

（やまもと あきこ 日本語日本文学科）